

〈原著〉

体外受精により我が子を得た母親の子どもに対する感情

大谷良子

岩手県立大学大学院看護学研究科 博士後期課程

要 旨

体外受精により我が子を得る体験をした母親の、子どもに対する感情を明らかにする目的で半構成面接とその分析を行った。その結果、母親の子どもに対する感情として、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」の5つが見出された。我が子への感情に影響を及ぼした母親の体験では、〈流産や死産〉〈不妊の負い目〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉の体験は、事態を好転させてくれた我が子という認識につながり、困難への対処を母親自身が模索することで人間的成長をした結果、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」といった感情に至ったと考えられた。一方で、〈不妊期間の長期化〉〈周囲のサポートの不足〉という体験は、母親の強い責任感と内向性・内罰性を助長し、「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」といった感情を高め、母親の感情が不安定になることが推測された。

キーワード: 体外受精, 体験, 母親, 感情

はじめに

1983年に日本で体外受精により初めての児が誕生して以降、生殖補助医療技術の進展はめざましく、子どもを望む多くの夫婦に恩恵をもたらしている。また、近年不妊に悩む人達に対し、次世代育成支援の一環として、相談センターの設置や特定不妊治療費助成事業など、体制整備や経済的援助が徐々になされてきた。しかし、不妊の問題は妊娠・出産で解決したわけではなく、むしろ子どもを得た後が重要であり、育児期における母子への支援も欠かせない。

不妊や治療体験を肯定的に捉えている母親は妊娠期から産後12ヶ月を通して児に対する愛着方向の感情が強いが、不妊治療体験を受け止めるのに困難のある母親は、児に対して嫌悪する方向の感情を強く持ちやすいとしている¹⁾。さらに、不妊治療の体験だけでなく、その後の妊娠・産褥期の体験の受容に困難性のある女性は円滑な育児を行えずにいる²⁾という報告もあり、不妊治療やその後の妊娠・出産が出生した児を養育する上でのリスクとならないような援助の必要性が求められている³⁾。しかし、不妊治療を受けた母親と子どもの母子関係の検討や、不妊治療中からその後の妊娠・出産・育児に対する看護援助が十分になされているとはいえない現状である。よって、不妊治療中から、妊娠・

出産を通しての体験を母親一人一人がどのように捉えてきたか、その体験が我が子への感情にどのように影響しているか、という母親の体験及び子どもへの感情を母親の視点からありのままにあらわすことが重要であると考えた。

研究目的

本研究では、夫婦間の体外受精により我が子を得る体験をした母親の、子どもに対する感情を明らかにすることを目的とした。

方法

1. 用語の定義

本研究では、『母親の体験』を不妊治療前から治療中・妊娠・出産・育児に至る期間に母親が体験した事象と定義する。なお、対象者の呼び方を、不妊治療中などの不妊期間においても、いずれ母親となる事を前提に「母親」と統一する。また、夫と対で指し示す場合には母親(妻)と表記する。

2. 研究概念

本研究の枠組みを図1に示す。不妊治療前から現在の育児期に至るまでの『母親の体験』が現在の子どもの

に対する感情に何らかの影響を及ぼしていると考えた。

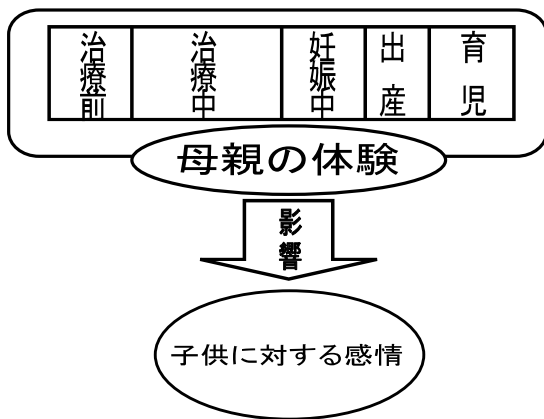


図1 本研究のフローチャート

3. 研究方法

1) 対象

夫婦間の体外受精により妊娠・出産に至り、現在0～2歳児を持つ母親、4名。

2) 調査手順

市町村の保健師や知人に紹介の協力を依頼し、対象者の紹介を受けた。その後、研究参加についての意思の確認を行い、研究同意書での同意を得た。

3) 調査方法

対象者と研究者が1対1になれる場所を設定し、インタビューガイドをもとに、半構成面接を行い、承諾を得てICレコーダーに録音した。面接の回数は1回、面接時間は1～2時間とした。

4) 調査内容

背景となる基本情報及びインタビューガイドに基づき、(1)各時期の体験についての対象者の感情や捉え方、(2)各時期における我が子への思い、について焦点を当て、面接をおこなった。

5) 調査期間

2007年5月12日から8月13日

6) 倫理的配慮

本研究の研究計画書は岩手県立大学大学院看護学研究科倫理審査委員会にて承認を受けた後、対象者に対し、研究の意義や目的、方法等を文書と口頭で説明した。

4. 分析方法

ICレコーダーから逐語録を作成し、記録内容から各ケースそれぞれにおいて(1)母親の体験をどう捉えているか、(2)母親の子どもに対する感情、について抽出・整理し、母親の子どもに対するそれぞれの感情に

どのような体験が影響しているのかを整理した。更に、各ケースから見出された結果をもとに、母親の子どもに対する感情とそれに影響している母親の体験の全体像をまとめた。

分析の信頼性と妥当性については、逐語録を熟読し、もとのデーターをチェックしながら、母性看護・助産学分野のスーパーバイザーの助言を受けて確認を行い、進めた。

結果

1. ケース概要

母親の年齢は32歳から40歳であった。不妊治療期間は1年から12年であった。全ケースとも母親側に不妊原因をみとめ、体外受精の体験回数は、1回から8回であった。子どもの年齢は生後3ヶ月から2歳9ヶ月で、子どもの健康状態は全員良好であった。不妊治療中から育児期にかけて、ケースDを除く3名には周囲に夫以外のサポート者はいなかった。(表1)。

表1 対象の背景

	ケースA	ケースB	ケースC	ケースD
母親の年齢	38歳	32歳	40歳	34歳
子どもの年齢	2歳9ヶ月	3ヶ月	1歳6ヶ月	1歳6ヶ月
家族構成	夫・子供1人	夫・子供1人	夫・子供1人	夫・子供1人
仕事の有無(職種)	治療中に退職(事務職)	妊娠中に退職(保育士)	妊娠中に退職(事務職)	仕事継続(介護福祉士)
治療内容	内服治療 タイミング法6回 体外受精1回	筋腫OP タイミング法10回以上 体外受精8回	通水法 タイミング法15回以上 体外受精5回	内服治療 体外受精1回
妊娠・出産経過	切迫早産(20週)にて入院	筋腫痛(16週)にて入院 帝王切開		
既往	流産2回・死産(24週)1回 子宮外妊娠1回		子宮外妊娠2回	卵巣嚢腫OP3回
周囲のサポート	なし	なし	なし	実の両親

2. ケースの分析結果

以下、(1)『母親の体験』を母親がどのように捉えていたか、(2)『子どもに対する感情』、(3)母親の体験がどのように子どもへの感情に影響しているか、についてケース毎に述べていく。なお、文中の斜字は母親の語りである。

1) ケースAの場合

(1)『母親の体験』がどのようなものであったか

a. 治療前・治療中

「流・死産は辛い出来事だった」

あちらは生まれる、こちらは流産してしまった、お兄さんとこは二人目ができたっていつて生まれた月に私は死産したんですよ。家族の言葉に傷つけられたっていうか。

「妊娠するため、体を安静に保つ生活が続け、体力を落としてしまった」

子どもがほしい為だけになってる自分がいる、それに合わせた生活、もう大事に。不妊治療する人たちの間違っではいけないのは、体力を落しちゃいけないってことですな。

b. 妊娠・出産期

「体外受精後に我が子が宿ったことで、自分達夫婦を前向きな精神状態にしてくれた」

あの人、私もきっと子どもがここにいて、この子はこの子で頑張っているから、って思えなかったらきっと言わなくていい事まで言ったり、してしまったんじゃないかって。あのうつ(病)の時の彼は本当に別人だったので、びっくりしますよね、でも生きてて良かったって思っ。あの時、もし妊娠しなかったらどうなってたんだろうってほんとに思いますな。

「出産の際、以前にも自分の子どもが存在したことを認識できた」

ああ、同じだあって思っ、すごうれしかったですね。私は前、出産したんだ、って思っのがうれしかった。

「体外受精で生まれたことは不思議だが、我が子に会うための流れの一つである」

自然妊娠してもだめなのに、体外受精をしたら生まれたからもう、不思議でしょうがなくて。体外受精で授かったけど変わりがない。

c. 育児期

「不妊や死産等の経験は自分の精神的成長を促してくれた」

たぶん、あの若さ、あの時の、今よりもまだ経験がない自分が子どもを持ったら、持つのが当たり前だという感覚で、子どもに接したら、大変だったろうなと思います。

「子どもを得た自分は幸せであり、我が子を一生懸命育て不満や愚痴を言うてはいけな、感情的になっではいけないと考えていた」

しゃべりたいと思ったときに、贅沢だとか、思うなと思うといえな。そういうときになくした子達の事を思えばっていうか、この子を一生懸命育てなければい

けないうて思っているのと裏腹に、なんかこう、感情的になったりとかするので、一人落ち込む。

「体調が優れないこと、また我が子の将来や成長を考えられないことで、余裕を持った育児が出来ないうでいた」

体が元気でいられて、妊娠まできていたら、この3年間もこんなことでイラッとしないうでいるような精神状態でいられたんじゃないかなって思っのがすごいうこう、そう思っ自分が嫌なんですけど。この一時間ちよつと休ませてとか、具合が悪いとか頭が痛いとか、なつたときに、預ける人がいない、んーちよつと預ける人がいるっていうのは、「みんないいね。」って思っきています。

怖くてできないうて思っ気持ちが先に立つので、いつもあたふたしています。今が、精一杯になつちやっ。

(2)『子どもに対する感情』

「我が子の存在に感謝する」

彼が病気(うつ病)したときに生まれたので、彼を助けるために来たんだなと思っましたね。元気なので、この体力のないお母ちゃんに合わせてうまれてきたんだろうなあ、て、感謝してんですけど。

「5番目の我が子に会えてうれしい」

これは順番がどこかで狂っても、この人には会えなかつただろうと思っているので、だから5番目で、良かったな。すごうれしかった。

「生きる力や意思を持った一人の人間である」

1人の人間がここにいて思ってる。生きる力っていうか、を持った子なんだろうとかっていうのを少しずつ感じられるようになってきたんですけど。

「大変さやイライラを感じるが、そう感じる事が申し訳ない」

何が大変で、一緒にいるのが大変でいうか。体が元気でいられて、妊娠まできていたらこの3年間も、こんなことでイラッとしないうでいるような精神状態でいられたんじゃないかなって思っのがすごいうこう、そう思っ自分が嫌なんですけど。やっしてしまっ。

(3)母親の体験がどのように子どもへの感情に影響しているか

「我が子の存在に感謝する」という感情は、我が子が胎内に存在したことで夫婦の危機を救ってくれた事に起因していた。うつ病の夫に生きる希望を持たせ、Aさんに精神的安定をもたらした。さらに、子どもを亡くす体験をしたAさんにとって、我が子が今、元気に存在していることが、感謝の感情をより深めていた。

「5番目の我が子に会えてうれしい」という感情は、我が子が誕生した事で、流産や死産という辛い体験を肯定的に受け止めることができたことが影響していた。辛い体験はすべて5番目の我が子が生まれてくるためのプロセスであったと捉えられたことで、我が子に対して5番目として生を受けて会えたことにうれしさを感じていた。

「生きる力や意思を持った一人の人間である」という感情は不妊や流産・死産、現在までの育児の体験が関与していた。Aさんにとって、不妊や死産等の体験は精神的成長を促すものであった。また、我が子を失う不安を抱いていたAさんは、2年半という育児体験をし、我が子自身の元気な姿や成長ぶりを見てきたことで、我が子はこれまでの子達とは違う生きる力を持った子であると感じられるようになった。これらのことから、我が子に対し、この子はこの子というスタンスで認めることが出来ていた。

「大変さやイライラを感じるが、そう感じる事が申し訳ない」という感情は、過去の流産や死産、不妊の体験からくる、強い使命感が影響していた。Aさんは子どもが出来ない人に比べ我が子を得たことは贅沢なことであり、また、この世に生まれ出なかった子ども達のためにも頑張らなければという使命感を持っていた。また、子どもを失うのではないかという不安、妊娠前からの体調不良のため、余裕を持った育児ができないでいた。そのような状況の中での使命感や不安感とともにある育児はAさんにとって負担となっていた。Aさんは我が子に対して大変さやイライラを感じ、しかし感情的になってしまう自分に嫌悪感を抱き、我が子に対して申し訳なさを感じていた。

2) ケースBの場合

(1)『母親の体験』がどのようなものであったか

a. 治療前・治療中

「妊娠自体大変なことだができることはやって、自分を納得させたい」

全部やったら、(子どもを)持てなくてもまず納得、言い訳じゃないけど、できるかなあと思ってやってたけど。昔は当たり前のことだったけど、治療してる人達もいっぱいいるから、すごい難しいことなんだろうと思って。

「夫婦二人の期間は気ままで自由だった」

結婚しても子どもができないんだったら、同棲してるのと一緒にかなと思って、こういう気ままなのもいいかなって。

b. 妊娠・出産期

「長期の不妊治療、あきらめかけていた時点の妊娠はうれしさよりも信じられない気持ちであった」

(妊娠は)信じられなかったですね。お腹が出てきてようやく、ほんとにいるのかなって感じで。

「仕事上の体験から、仕事をやめ、子どもが幼いうちは常にそばにいて育児に専念したいと考えた」

仕事のなかで、お母さんと一緒に居た子の方が気持ち安定してるような、んー、気がしたんです。個性かもしれないですけど。仕事を続けるのが悪いとは思わないですけど、やっぱり要る時(母親が必要な幼い時)に(母親がそばに)居ないっていうのは良くないのかなって思って。

c. 育児期

「元気な我が子の誕生が、体外受精による障害の不安を打ち消してくれた」

やっぱり、調べるっていうのは(障害が)気になってたんでしょね。(生まれた時)ああ、おっきいって。大きいし、なんか顔つきも、はかない(儚い)って感じじゃなくて、しっかりしてたんですよ。元気そうで良かったって思いました。

「体外受精時に見た受精卵が成長し我が子が誕生したことで、生命の不思議さ、神秘性を感じていた」

ほんと、いつも(子どもを)みてるって、ほんと不思議だなんて、ほんとあの卵から。

「育児が上手くできない自分は、他の母親と比べて駄目な母親ではないかを感じていた」

おっぱいが出なくて、今は、母乳がいいっていう時代じゃないですか、だから、もう、出ないのが情けないっていうか。ほんとに私ができなさすぎるのかなって思ったり、結構ずばらなお母さんとかいても、あのお母さんでもあそこまで大きくしたんだ、でも、私は駄目かもと思って.. (ため息)。

(2)『子どもに対する感情』

「我が子の成長に楽しみ、うれしさを感じる」

やっぱ、笑うようになってきて、あやせば、お話しもいっぱいするようになってきて、それは楽しいですね。なんか、大きくなってくれるのはうれしいんですけど、(あつという間に成長してしまう)ちょっと淋しさもあって、成長の過程を全部(ずっと)みてたいっていうか。

「大変さを感じ、十分に手をかけた育児ができないことで、我が子に申し訳なさを感じる」

やっぱり大変さは感じてますね。泣いてるのを聞いてる方も参っちゃうっていうか、理想と現実の違いですね。泣いてても、自分は休みたいとか。もっと、子どものこと見てればいいのに、実際(は、できていない)。

「我が子のせいで不自由だと感じるが、そう思うことはいけないことだと思う」

旅行とか一緒に行ってた友だちが、「今度どこに行く」とか言ってるのを聞くと「ああ、私は行けないな、子どもが居なかったら私も行ってたな」って思ってた、正直。ああ、だめだめ、そんな事思っちゃって思うんだけど。

(3) 母親の体験がどのように子どもへの感情に影響しているか

「我が子の成長に楽しみ、うれしさを感じる」という感情は、長い不妊期間や治療体験が影響した結果であった。あきらめかけていた矢先の妊娠・出産はBさんにとって、驚きや不安が大きかった。しかし、元気な我が子を出産したことで体外受精による障害の不安は払拭された。さらに体外受精で生命に対する不思議な思い、神秘性を感じ、現在の我が子の成長する瞬間をつぶさに見守りたいと考えた。日々成長する我が子に、生命のすばらしさを実感し、楽しみやうれしさにつながっていた。

「大変さを感じ、十分に手をかけた育児ができないことで、我が子に申し訳なさを感じる」という感情はBさんが不妊期間中から“常に子どものそばにいて育児に専念する”という育児観を持っていたことに関連していた。Bさんは、保育士という職業体験から、子どものそばにいて十分に手をかけてやれると思っていた。しかし、泣いても自分の休息を優先する現実には、駄目な母親という思いを抱き、我が子に対し申し訳なさを感じる結果となっていた。

「我が子のせいで不自由だと感じるが、そう思うことはいけないことだと思う」という感情は長い不妊期間が影

響していた。Bさんは夫婦二人だけの生活が長く、自由な時間が持っていた。Bさんは自分自身の出産前後の生活のギャップを強く感じ、自由がないと感じるに至った。しかし、“常に子どものそばにいて育児に専念する”という育児観を持っていたBさんは、そのような不満も自分を責める思いをも抱くに至った。

3) ケースCの場合

(1) 『母親の体験』がどのようなものであったか

a. 治療前・治療中

「子どもを持てない悔しい思い、夫に対し不妊の負い目を抱いていた」

もちろん結婚すれば妊娠して、子どもが生まれて家族が出来てって、それがみんなが当たり前なのが、なぜ私にはできないんだって。不妊治療中も、私が相手でなければ主人は子どもと家庭がもてたのに、と落ち込みました。本音を言えば辛かったです。

「子どもから逃げずに子育てをしたいという責任感から血縁へのこだわりを持っていた」

生まれたばかりの赤ちゃんを、養子にいただくことができて、最初から手をかけていったとしても、心のどこかで、自分の血は入ってないんだとか、なんかの問題にぶつかったときに、そういうふうになんか自分が逃げてしまいうので、嫌だったんですね。だから、なんとか自分たちの血が繋がってる子がほしい、それを主人にも抱かせてあげたいっていう、そういうふうに思いましたね。

「子どもをあきらめる気持ちと、自分に可能性がある限りはあきらめたくないという思いが混在していた」

授かることができないのかもしれないってほんとにあきらめてたもんですから、ただ、あの生理があるうちは、可能性がないとは思えなくて。

「病気入院したことで、子どもを持つ意味、不妊治療のその先を考えられるようになった」

一ヶ月間入院している間に様々な事考えたらやっぱりほしいよな、みたいな。ほんとにほしいって。どうしてほしいのかなっていうこととかも主人とこう、話が出来たのかも知れないですねその時。不妊治療があつて、ゴールは妊娠じゃなくて、出産して、その後もってことですよね。その後のことまでが考えられたのがたぶんその時だったんだと思うんです。

b. 妊娠・出産期

「妊娠に驚き、信じられない中で、我が子の健康を願っていた」

(妊娠反応が)出たので、でもその時は「いやいや、まだわかんないぞ、わかんないぞ。」って。お腹大きくなってきても、「うそおー」みたいな感じでしたねずっと。とにかく元気っていうか、健康であればいいっていう、「とにかくげんきで、げんきで、」って思って。

c. 育児期

「我が子を胸に抱き、世話をしていくことで、我が子の存在を実感した」

おっぱいあげたりとか、始めてやっとな、「あーほんとなんだ」みたいな。

「我が子から逃げない、自分の感情を直接ぶつけない母親を心掛けた」

普通に妊娠できてたとしたらば、子どもに対して、もしかすると逃げることをすごく多く作ったかもしれない。ほんとにね若いうちだったらば、不満をぶつけてたかもわかんないですけど、いらっとはたまにしますが、それは直接本人にぶつけないとかはしないようにしようと、努めています。

「夫の仕事を考え、育児はなるべく夫に頼らないようにしていた」

家庭も大事だけでも、仕事のほうを男だから、そっちをね、中心に考えて行きたいから、子どものこととか、家のこととかっていうのは、できるだけ私がって。

「思い描いていたとおりに育児が出来ないことに戸惑いを感じていた」

なんかこう、余裕で出来そうなみたいのがあったんですけど、やっぱりできなかったですね。すべてがはじめてで、四六時中ずっと一緒に居て、全部のお世話ってなると、体力と気力と、すべてにエネルギーが必要だなんて思いましたね。こんなはずじゃなかったって。

(2)『子どもに対する感情』

「すべてをクリアさせてくれた我が子に感謝する」

出来てしまえばこっちのもの、っていうのも、変ですけど、だから、手段はなんだろうが、私は、出来たってことはもうありがたいことって、受け止めましたね。(この子を)授かったことですべてクリアしたのかも。

「我が子がいる喜びや成長する楽しみを感じる」

日に日にほんとにあの、成長してきますよね。そういうのを見てるとほんとにあの、自分たちの子どもなんだなって感じて、やっぱりうれしいですね。

「期待どおりに動かない我が子に対して、もどかしさやイライラを感じる」

何にもこう手につかないっていうか、それがちょっとストレスになったりとかも。まだ叱っても叱られたことを理解できないっていうか、どうして叱られたかも理解できない状態なので、こっちがもういらっとながら、「もう」って感じですけど。

「出来るだけそばにいたいと感じる一方、保育園に預けてしまいたいとも感じる」

早く預けたほうがいいのかと思いますけど、できるだけ3歳になるまでみてあげたほうがいいのか。と。「もう預けてしまいたい」とか、「いややっぱり3歳まで」とか。「もう、ちょっと」とかって。(預けると)淋しいのかもしれないんですけど、今のところはあんまり。

(3)母親の体験がどのように子どもへの感情に影響しているか

「すべてをクリアさせてくれた我が子に感謝する」という感情は、長い不妊期間の体験が影響していた。長期間妊娠できない辛さ、夫への負い目を抱えていたCさんは、我が子の誕生により救われたことで、我が子への感謝の思いを抱くようになった。

「我が子がいる喜びや成長する楽しみを感じる」という感情は、妊娠しても実感がわかないほど、我が子をあきらめかけていたCさんにとって、我が子の成長をみることは生命の再確認であり、子どもの存在を実感できる楽しみにつながっていた。

また、「期待どおりに動かない我が子に対して、もどかしさやイライラを感じる」や「出来るだけそばにいたいと感じる一方、保育園に預けてしまいたいとも感じる」という感情は長い不妊期間で得た母親としての責任感が影響していた。Cさんは不妊期間中の入院により母親としてどうあるべきか考え、“子どもから逃げない、自分の感情を子どもにぶつけない、”という育児姿勢を持つに至った。以前から血縁にこだわっていたこともCさんの責任感の表れであった。一所懸命我が子に接するほど、思い通りにならない我が子に、イライラを感じる結果となっていた。加えて、夫に育児への協力を強く求める

ことが出来ず、Cさん一人が育児を抱え込んでしまったことも、Cさんの「我が子を預けてしまいたい」という感情を強める結果となった。責任感の強いCさんの中で、「そばにいたい、保育園に預けてしまいたい」という両者での葛藤を引き起こしてしまっていた。

4) ケースDの場合

(1)『母親の体験』がどのようなものであったか

a. 治療前・治療中

「独身時代から不妊治療を覚悟し、結婚後は体外受精を考えていた」

たぶんそれ(不妊治療)は1回目の手術をした時から、私の中で覚悟が出来ていたことだと思うので、そこを越えないと次のステップには行けない、同じ線に立てないじゃないですか、体外受精が出来るとっていう線に。

「実母の言葉や手助けは非常に心強く、実母を一番の理解者であり、協力者であると認識していた」

母もちょっと不妊治療、3年くらい出来なくて、1番の理解者だったので...ある程度は手助けしてやらなきゃなって思ってたみたいなので...

「仕事に追われ、不妊治療を辛いと覚えることもなかった」

その間は、辛いつて思ったことあんまり私無いんですけど、辛いつて考える暇も無かった、意外とそういうときのほうが結果がついてくるって多くないですか？無我夢中でやってる時のほうが。

b. 妊娠・出産期

「1回の体外受精で我が子を授かった自分の苦労は、他の人達の苦労や悩みには及ばない」

不妊治療はやっぱり授かりものなので、私はほんとに、入り口のところで授かってしまったので。人工受精何回やった、体外受精何回やったっていう、そちらの方のほうの苦労の方がたぶんすごく私の計り知れないところだと思う。

「我が子を妊娠したことはめぐり合わせであった」

(この子は)授かる気がしてた。おじいちゃんが2日に死んで、次の年の3日に私が生まれたって事にもご縁があったんですけど、だからなんとなく落ちない気がしてたんですよ、私の中で。

「我が子が宿ったことは、休職中の夫を励まし、夫婦の危機を救ってくれた」

うちの旦那その時休職中だったんですよ、だから、主人もがんばれたと思うんです。(私も)頑張らないといけないんだなって...

「我が子を授かることで、長男の嫁としての役割を果たし、負い目から解放された」

主人の方のお父さんとかお母さんは私の事をかなり心配してたと思うんです。子どもを授かるか授からないかっていうところでは、その所でいうなら私は役割を果たせた。

c. 育児期

「働く姿を我が子に見せ、自立した女性でありたい」

働いていたい、働いている母親で育ててほしい。母が働いて育ったので、働いている母親の背をみて育ててほしいというか、働いて、あとはS(子ども)が働く女性になったら、対等にお話ができるようでありたいなと。うちの母がそうであるように、そう思います。

「両親は、仕事を持つ自分にとって、頼もしい協力者であった」

父と母には感謝してます。すごく感謝してます。最近じゃ当たり前前の顔をして夕飯を食べていくなされます。(子どもの体調が悪いとき)おじいちゃんおばあちゃんところをお願いするってことが一番多いかな。

「仕事を持っている分、我が子の思いを受け入れようと心がけていた」

自我っていうところでは、叩いたりとか「いやーいやー」とかってのは最近、よくでてる言葉だなとは思ってましたね。うちの子、早いんです、起きるのが、で、お外に出たがる。でもそこでコミュニケーションとらなければ、うちはたぶん、コミュニケーションとりづらいと思うんですよ。

(2)『子どもに対する感情』

「我が子が自ら選んで生まれてきた我が子に感謝する」

よく、S(子ども)は私たちを選んで来たなとか、まず、仕事が見つからない状態の彼と私のところに降りてきたSって、かなりばくちだなってそんな風に思っていました。

「我が子の存在に、楽しみ・喜びを感じる」

とにかく楽しい。授からなければきっと感じられなかったこと、例えば、誕生日、保育園の進級式とか、入学式、まず、そういうのに参加できたりとか、そういうことはなんか感じ得なかったことですね。

「我が子は一人の女性であり、頑張っている」

自立した女性になってほしいなと思います。Sもあちらの、保育園の世界で頑張ってると思います。

(母は)3年くらい(子ども)出来なくて、1番の理解者だったので。1番の理解者であるために私は(体外受精のことを)話したいと思います。珍しいことじゃないかもしれないし。

「時々イライラを感じるが我が子は悪くない」

イライラするときもありますけど、何のときっていうと、自分が忙しくなってくると、よく言うじゃないですか、お母さんが忙しいと子どもが熱出すって。そういう感じなので、イライラもしますけど、でも、子どもが悪いわけではないのでね。

(3) 母親の体験がどのように子どもへの感情に影響しているか

「我が子が自ら選んで生まれてきた我が子に感謝する」という感情はDさんの不妊治療前や体外受精時における体験が影響を及ぼしている。Dさんは25歳で卵巣嚢腫の手術を受け、我が子を得るプロセスとして、体外受精が必要だと捉えていた。1回目の体外受精で、我が子が授かったこと、Dさんの祖父の命日の前後に妊娠が判明したことで、我が子が、自分たちを選んで生まれてきてくれたという思いを抱いた。さらにその妊娠が、夫の失業で、夫婦の危機にあった時期のDさん夫婦を助けてくれ、Dさんの嫁としての責任からも解放してくれた事が、感謝の感情をもたらしていた。そうして「(感謝すべき)我が子の存在に、楽しみ・喜びを感じる」という感情につながっていた。

「我が子は一人の女性であり、頑張っている」という感情は、Dさんの女性特有の疾患の体験や、Dさん自身が職業を持っていることが影響していた。Dさんは不妊治療の体験から、娘である我が子も、将来自分と同じ不妊体験をする可能性を持った女性であると捉えた。また、自分が職場で頑張っているのと同様に、我が子も保育園という場で頑張っていると認めることができていた。

「時々イライラを感じるが我が子は悪くない」という感情

情はDさん自身が仕事を持っている事や周囲のサポートが影響していた。自分が仕事をしている為、その分我が子とのコミュニケーションの機会を多くしようと心がけ、自我や甘えを受け止めようとするといったおおらかな育児姿勢がみられた。また、両親の多くのサポートもDさんの精神的負担を軽くしていた。Dさんの精神的余裕は我が子に多少イライラを感じても、自分が忙しいためだと反省し、我が子が悪いわけではないという感情につながっていた。

3. 母親の『子どもに対する感情』とそれに影響する『母親の体験』の特徴

各ケースの母親から見出された『子どもに対する感情』は「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」の5つであった。また、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情と「イライラ感・大変さ」というアンビバレントな感情が混在する状態が認められた。

以下、どのような体験が影響してそれぞれの感情に至ったかを述べる。

1) 楽しみ・喜び

すべての母親が子どもに「楽しみ・喜び」という感情を抱いていた。母親にとって、〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉は度重なる絶望感や失望感を感じるものではあったが、生命の複雑さや不思議さを熟知するに至った体験でもあった。そのことが、生命のすばらしさを感じる結果となり、我が子の成長をみることは生命の再確認となり、「楽しみ・喜び」という感情につながっていた。

2) 感謝

ケースA、ケースC、ケースDの母親3名から、我が子の誕生や存在に対し、「感謝」という感情が語られていた。この感情は、不妊期間中の〈流産や死産〉〈不妊の負い目〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉などのストレスフルな体験を、我が子の誕生がすべて解決してくれ、「辛い状況や事態を好転させてくれた」と捉えたことにより、もたらされていた。

3) 尊重

ケースA、ケースCの母親は我が子を一人の個人として、ケースDの母親は我が子を一人の女性として「尊重」の感情を抱いていた。これは、不妊期間中の〈流産や死産〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉などのストレスフルな体験が母親の人間的成長を促し、母親としての育児姿勢の確立につながったことが影響していた。

4) イライラ感・大変さ

ケースA、ケースB、ケースCの母親からは、我が子に

対して「イライラ感・大変さ」という感情が語られていた。これは〈不妊期間の長期化〉による我が子が生まれるまでの夫婦二人の自由な期間と、我が子が生まれてからの生活とのギャップ、不妊期間中の人間的成長による、我が子の育児に対する使命感や責任感が関係していた。我が子に対し、使命感・責任感を持つ反面、思い通りにならない我が子に、「イライラ感・大変さ」という感情を持つに至った。加えて、母親への〈周囲からのサポートの不足〉は、精神的余裕の無さを生み出し、「イライラ感・大変さ」という感情につながっていた。

5) 申し訳なさ

ケースA、ケースBの母親からはイライラ感を持つことや、きちんと面倒をみられないことに関して、我が子に「申し訳なさ」を感じていた。どの母親も、不妊期間における体験は、母親としての育児姿勢を考えるものであったと語っているように、不妊というストレスフルな体験による人間的成長と、〈不妊期間の長期化〉により、我が子に対する強い責任感・使命感を抱いていた。そして、きちんと母親の責任が果たせない事で、「申し訳なさ」という感情につながっていた。

考察

1. 母親の『子どもに対する感情』について

本調査から母親の『子どもに対する感情』について、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情と「イライラ感・大変さ」という相反する感情、すなわちアンビバレントな感情が混在する状態が認められた。

花沢⁴⁾は母親の児に対する感情を二方向に捉え、児を肯定し受容する方向の感情を接近感情と呼び、児を否定し拒否する方向の感情を回避感情と呼んでいる。本調査で見出された、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情は接近感情に属し、「イライラ感・大変さ」という感情は回避感情に属すると考えられる。また、不妊治療の母親の産褥期の対児感情は、接近項目・回避項目共に自然妊娠の母親に比べ高い傾向がみられ⁵⁾、また、不妊治療というストレスフルな体験を受け止めるのが困難な母親は、児への愛着感情と共に児を拒否する感情を強く持ちやすい⁶⁾とされている。本研究において、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情と「イライラ感・大変さ」というアンビバレントな感情のどちらも持ち合わせている状態は先行文献と同様であった。また、大日向⁷⁾は、母親の児に対する愛着は、“相手を支えたい・愛したい”という要求とともに“相手に支えてもらいたい・愛されたい”という方向の要求もみられ、両者の関

係は児の成長や母親自身の属性によって変容し発達することを見出している。体外受精という体験をした母親は、我が子に対する愛着がより深く、「相手を支えたい・愛したい」と強く思うがゆえに、我が子からの思いがつかみ切れず「イライラ感・大変さ」を強く感じてしまう結果となっていると考えられる。

さらに、子どもに対する強い思いは、「申し訳なさ」という感情にもつながっていると考えられる。この「我が子に対して申し訳ない」という感情は、罪悪感をともなった感情であり、母親の、“自分は母親として不適格ではないか”という意識から生じた感情ともいえる。母親としての適性に疑問を抱くのは、母親役割をきちんと遂行したいという思いの裏返しであり、母親が子どもと向き合っているからこそ生じる感情ではないだろうか。よって、「申し訳なさ」という感情は、不妊治療を体験した母親の我が子に対する強い思いから生じた特徴的な感情と思われる。

2. 母親の『子どもに対する感情』に影響する『母親の体験』について

母親の『子どもに対する感情』に影響を及ぼしていた『体験』は不妊期間中の〈流産や死産〉〈不妊の負い目〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉などのストレスフルな体験や〈不妊期間の長期化〉不妊治療中から育児期を通じた〈周囲からのサポートの不足〉に代表された。

不妊治療中の〈流産や死産〉や〈不妊の負い目〉の体験は「感謝」という子どもへの感情に影響していた。不妊治療を受ける女性は外圧(他者から子どもを持つことを望まれる)や内圧(自身が子どもを持つことを強いる)などに悩むといわれている⁸⁾。面接した母親も、例外ではなく、よって我が子の誕生は“我が子が事態を好転させてくれた”という認識となり、「感謝」という感情を持ったと考えられた。このような経緯は不妊女性の特徴といえる。

〈流産や死産〉〈不妊の負い目〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉などに代表される不妊期間中のストレスフルな体験は、母親の人間的成長を促し、「尊重」という感情に影響していた。森ら⁹⁾は、不妊治療女性にとって、不妊治療体験が自己成長となったと報告している。また、妊娠・出産・産褥というプロセスにおいて遭遇するであろう問題は、親になる上で有意義な機会を提供し、成長発達させる要素となるといわれている¹⁰⁾。これは、妊娠に至るまでのプロセスである不妊治療という困難も、親になるための有意義な機会と捉えられるのではないだろうか。不妊期間をストレスフルな体験で終わらせるのではなく、有意義な機会ととらえられるような周囲の

支援が重要である。

一方〈不妊期間の長期化〉は「イライラ感・大変さ」と「申し訳なさ」という感情に大きく影響を及ぼしていた。これは、不妊という長いつまづきを育児で挽回したいという思いと共に、母親の我が子の育児に対する強い責任感や使命感が関係していると考えられる。Ross Buck¹¹⁾は、愛着は内発的な動機づけに影響を及ぼしているとし、その一つは「期待にそいたい・期待以上でありたい」という欲求であるとしている。また、体外受精を受けている女性は、不安と共に神経症的傾向、内向性が強い¹²⁾とされているが、我が子が誕生し母親となっても、その熱心さ・一途さが影響していると推察される。不妊治療期間の長いAさん、Cさんは、やっと授かった子どもに対し「楽しみや喜び」「感謝」の感情とともに、「頑張って育てなければ」、「逃げずに育児をしたい」との思いも抱いていた。「楽しみや喜び」「感謝」の感情は愛着に通じる感情であり、愛着があればこそ、「期待以上の母親でありたい・頑張って育てたい」という思いを強く抱いた。そうして、我が子に対する強い責任感や使命感へとつながったのではないかと考えられる。しかし、思いが強いほど、思い通りにならない我が子に対し、2名の母親はイライラ感を持ち、母親によっては、一緒にいることに負担を感じてしまう結果となったと思われる。

加えて、体外受精の治療を受けている女性は、状態不安が高く、内罰的に捉える傾向が強い¹³⁾ともいわれている。〈不妊期間の長期化〉は子どもに対する責任感とともに、内罰傾向を強め、「申し訳なさ」という感情に至ったと考えられる。良い母親でいたいという思いが強く存在する一方、多くの不安を抱き、起こった問題の原因が自分自身にあると考える、内罰的傾向に陥りやすかったと思われる。実際に「子どもに体調不良でイライラすることが申し訳ない」と感じている母親が、現在の体調不良は不妊治療中の自分の生活に原因があると自分を責めていることは、内罰傾向のあらわれだといえる。さらに、マタニティブルーズにおいて、体外受精を受けた母親が自然妊娠や他の不妊治療後妊娠の母親に比べ、有意に高得点であった¹⁴⁾ということをもまえ、この「申し訳なさ」という感情とマタニティブルーズというリスクの関係性も考えていかなくてはならない。

さらに、母親への〈周囲からのサポートの不足〉も「イライラ感・大変さ」という感情に影響していた。育児中の女性には母親としての自己と母親として以外の自己が存在し¹⁵⁾、母親が家族や友人から母親以外の個として支援されることが母親の情緒支援感を高め、育児不安

の軽減につながるといわれている¹⁶⁾。本調査において、仕事を継続し、夫や両親のサポートが充分なDさんは「イライラ感・大変さ」をほとんど感じていなかった。これは働く母親を“個として認め、支援する”といった精神的サポートがなされているために、母親が精神的余裕を持てたのではないかと考えられる。Dさんは、不妊治療の際、仕事が忙しく、治療だけを考えた毎日ではなかったことと同様に、育児期も、我が子にだけ意識が集中していないことがかえって精神的余裕となっていたと考えられる。反対に、体調不良でも預ける人がいないAさんや、夫が家業を継いでくれていること、不妊原因が自分にあったことで、夫に負い目を感じ、“育児はなるべく夫に頼らないようにしていた”Cさんは「イライラ感・大変さ」を強く感じていた。周囲のサポートにより母親としての頑張りを認めることはもちろん、母親以外の「個人」として認め支援をしていくことは、長い不妊治療中および育児期においても重要であると考えられる。(図2。)

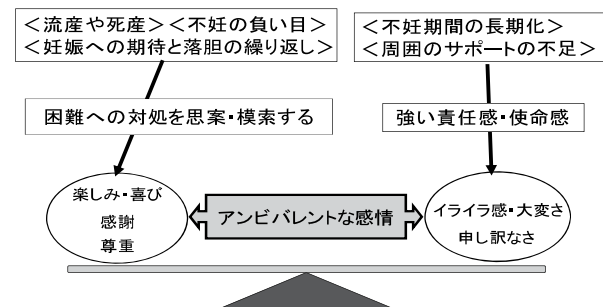


図2. 母親の子どもに対する感情と影響した体験

3. 母親の『子どもに対する感情』の安定を図るために

母親の「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情と「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」という、相反する感情が拮抗状態に陥らないよう、『子どもに対する感情』のバランスの安定を図ることが重要である。そのためには、不妊治療後生まれるであろう子どもの養育を考慮した支援が必要と考える。現在、不妊女性に対するカウンセリングなどがなされてきているが、そのカウンセリング内容は目の前の不妊治療や現状に関するものがほとんどであるといえよう。今回の結果から、不妊期間中だけでなく、妊娠後も含めた各期におけるケアの充実が必要であると考えられた。すなわち1) 不妊期間中においては、ストレスフルな体験や状況を母親がしっかり受け止められ、母親の成長する要素となり、スムーズな母親役割の獲得がなされる機会となるような支援、また、2) 母親自身の人生において不妊治療や今後の育児というも

のをどう捉え、位置づけるかということを視野に入れた支援、3)育児期においては、母親が孤立しないよう、家庭以外の母親の場の提供など看護者から積極的に関わっていくこと、が必要となる。具体的には、夫を含めたカップルへ対するカウンセリングや不妊治療中から育児期にわたって参加できる自助グループの立ち上げなどが考えられる。依然、不妊治療という体験を周囲に公表しづらい社会状況である。また、不妊治療を行った母親自身も、アンビバレントな感情のゆれを意識しないまま、感情や問題を抱え込んでしまう可能性が推測される。そのような母親に対して、看護者側から、母親が自らを表出しやすい状況を作り上げることが大切である。母親の思いや感情をそのまま受け止め、母親の強い責任感や使命感、負担感の軽減をはかることが求められる。

結論

今回の研究から、体外受精により我が子を得た母親の子どもに対する感情について以下のことが明らかとなった。

1. 母親の子どもに対する感情について、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」の5つが見出された。「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情と「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」という感情はアンビバレントな感情であった。さらに、「申し訳なさ」という感情は、不妊治療を体験した母親の我が子に対する特有な感情と思われた。
2. 「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」という感情は我が子が生活の状況を好転させてくれたという体験、不妊治療による生命のすばらしさの実感、母親の人間的成长からであった。「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」という感情は、母親としての強い責任感や使命感と現実とのギャップにより生じていた。
3. 〈流産や死産〉〈不妊の負い目〉〈妊娠への期待と落胆の繰り返し〉などの不妊期間のストレスフルな体験は、その困難や問題を前に、母親自身が模索し思案していくことで、母親を成長発達させる要素となり、「楽しみ・喜び」「感謝」「尊重」といった感情に結びつき、親役割を獲得するための有意義な機会になるとと思われる。一方で、〈不妊期間の長期化〉や夫をはじめ〈周囲のサポートの不足〉は母親の強い責任感と内向性・内罰傾向を助長し、「イライラ感・大変さ」「申し訳なさ」といった感情を強め、母親の感情が不安定になることが推測された。

以上をふまえ、母親の子どもへの感情の安定を図るために、母親(妻)と夫に対し、不妊治療や妊娠中か

ら、子どもの養育を視野に入れ、親役割の獲得に向けた支援や、育児期における看護者側からの積極的な関わりが必要と考える。

おわりに

本研究は体外受精を受けた母親4名と限られた人数であることから、次の3点が今後の課題となった。まず、さらに対象数を増やし、多様な母親の感情の傾向を捉えていくこと、また対象者への継続した面接を行い、長期的に母親の感情を明らかにすること、夫への調査をおこなうことで母親(妻)を中心とした家族との関連性を明確にしていくことが必要と考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、快く調査にご協力くださり、貴重な体験や思いを語ってくださいましたお母様方とご家族に心より感謝いたします。また、ご指導いただきました岩手県立大学大学院看護学研究科の諸先生方に感謝いたします。

本論文は岩手県立大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

- 1) 森恵美, 陳東, 糠塚亜紀子. 不妊・不妊治療経験が母性不安と対児感情に及ぼす影響. 日本不妊看護学会誌. 2005;2(1):28-34.
- 2) 大槻優子. 不妊治療後に妊娠・出産した女性の心理-8事例の面接調査の分析結果から. 母性衛生. 2003;44(1):110-120.
- 3) 塩田広郷, 本間葉子, 稲森絵美子. 不妊治療と子育て支援. 周産期医学. 2001;31(6):803-806.
- 4) 花沢成一. 母性心理学. 東京:医学書院;1992. 61-91.
- 5) 大嶺ふじ子, 儀間継子, 宮城万里子, 仲村美津枝, 島尻貞子, 他. 不妊治療を受けた妊産褥婦の不安と対児感情について. 母性衛生. 2000;41(4):439-443.
- 6) 同上 1)
- 7) 大日向雅美. 母性の研究. 東京:川島書店;1988. 199-244.
- 8) 赤城恵子. 不妊状態の心理とその対応. 母子保健情報. 1999;39:35-40.
- 9) 森恵美, 陳東. 不妊治療によって妊娠した女性における不妊・治療の経験. 日本不妊看護学会誌. 2005;2(1):20-27.

- 10) 久米美代子. 妻から親への社会科過程—子どもの誕生によって起こる問題—. 日本ウーマンズヘルス学会誌. 2002;1:27-35.
- 11) Buck. R. 感情の社会生理心理学. 東京:金子書房;2002. 673-693.
- 12) 森恵美, 盛岡由紀子, 斉藤英和. 体外受精・胚移植法による治療患者の心身医学的研究(第1報)—不妊治療女性の心理状態について—. 母性衛生. 1994;35(4):332-340.
- 13) 同上 12)
- 14) 佐久本薫, 金澤浩二. 不妊症治療後の妊娠女性における母性形成と対児感情. 周産期医学. 2004;32(1):33-38.
- 15) 山崎あけみ. 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—「母親としての自己」・「母親以外の自己」の分析—. 日本看護科学学会誌. 1997;17:1-10.
- 16) 川崎浩美, 海原康孝, 小坂忍, 出路愛, 片野隆司. 母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討. 小児保健研究. 2004;63(6):667-673.
- (2009年10月2日受付, 2009年12月25日受理)

<Original Article>

A Mother's Sentiments towards a Child Conceived through in Vitro Fertilization

Yoshiko Otani

Iwate Prefectural University Graduate School, Graduate School of Nursing, Doctoral Program

Abstract

Semi-structured interviews and their analysis were conducted with the aim to clarify a mother's sentiments towards a child conceived through in vitro fertilization. As a result, the following 5 sentiments were observed: "excitement & joy", "gratitude", "appreciation", "frustration & hardship", and "remorse". As regards experiences that have affected mothers' sentiments towards their child, experiences such as "miscarriage or stillbirth", "guilty conscience over infertility", and "repeated hope and disappointment over being pregnant", led mothers to realize their child changed things for the better. As a result of mothers dealing with such challenges, growth as human beings led to such sentiments as "gratitude", "excitement & joy", and "appreciation". On the other hand, "prolonged period of infertility" or "deficiencies regarding support from one's environment" are presumed to foster a mother's strong sense of duty and introverted/intropunitive feelings, as well as increase sentiments of "frustration & hardship" and "remorse", thus leading to sentiments of uncertainty in mothers.

Keywords : In vitro fertilization, experience, mother, sentiment.